（別紙様式）

令和６年度かながわ学びづくり実践研究推進校　実践報告

茅ヶ崎市立東海岸小学校

研究テーマ：自他共に認め合う子を育てる

～子どもが道徳的価値の見方を広げ、自己の生き方について理解を深める授業づくり～

１　実践の目的

研究開始に先立ち、本校の児童の実態を確認した。それは、知識・理解面では良好なものの、自分の考えに自信を持てない、みんなの前で考えを伝えるのが不安、他者のことを考えるのが苦手、というものであった。

これらの実態に対して、子どもたちの不安そうな姿から自己肯定感を高めたい、自分も友だちも大切にして欲しい、という教師の思いが生まれた。ここから、研究テーマを一旦「自他共に認められる子を育てる」に決定し、道徳科の学習場面に焦点をあてた授業改善と児童の変容の追究を開始した。

検討を進める中で「特別の教科　道徳」の学習指導要領、内容項目等を踏まえて研究テーマを一部変更し、「自他共に認め合う子を育てる」とした。

２　実践の内容

（１）校内研究の体制

校務分掌４グループのうち「研究・カリキュラム」が研究推進を担当し、実際の活動では学年単位を中心に、必要に応じて低・中・高学年単位の研究場面も設定した。これは学年ごとの実態、課題から学習内容を深めるという側面と、６年間の学びの連続性を意識するための第一歩としての近接学年での検討、という側面からである。

（２）実践の取組

日本大学理工学部・経済学部非常勤講師、日本道徳教育学会神奈川支部理事の三ツ木純子氏を講師として招聘し、茅ヶ崎市教育委員会指導主事も招いて、道徳科の授業改善を行った。学年単位で協力して先行授業を行うとともに、全学年が公開授業を実施し、協議会で取り組みの検討を行った。

（３）研究活動の工夫

あわせて、授業で創るクラスを目標に学校内の教職員を講師にした学級経営研修を実施した。それは、①学級経営のイロハ４月編、②体育科学習と学級経営、③保健室から見る学級経営、④対話を通して整える学級経営、⑤学級掲示・学習環境から見る学級経営、⑥支援から考える学級経営、⑦学級風土と現代社会の狭間を考える、と多岐にわたった。主目的は道徳科の授業がより円滑に行えるための実施であったが、校内のOJTの意味合いもある取組となった。

教職員間の話し合いを共通化するために、指導過程のねらいと教師の働きかけについて、留意点を含めた表の形式で整理した「東海岸小授業のレシピ」を活用しつつ、「授業づくりシート」によって、授業に向けた検討を行う学年や、低・中・高学年ブロックで、教材研究の教材解釈を共通化し、児童観、授業者の思い、研究のサブテーマに対する本時のねらい・ゴール（評価）を記入し、検討を容易にした。

（４）授業実践

授業実践は、児童観を中心とした授業研究を意識し、「道徳的価値を知らせる→価値を考える→価値を深める」という流れをつくった。その中で「展開前段の演出、中心発問づくり、対話活動、役割演技、展開後段の

振り返り」について研究を深めていった。

（５）役割演技

本校では、児童の内面を表出しやすくする取組として「役割演技」を採用した。これにより動作化を通して教科書にある台詞や児童が工夫して考えた台詞、とっさに口から出たアドリブの台詞等を通して、演技者となった児童は、体験した役の道徳の内容項目に関連する内面を言葉で表現し、演技を見ていた児童は役の演技をみて、内面を想像し発言するという取組である。「役割演技」により内面の表出へのハードルが低くなり、意見を共有しやすくなり学級としての「共通解」を探ったり、個人の道徳的価値を深めた「納得解」をさぐりやすくなったりすることにつながった。

３　実践の成果と課題

（１）成果・道徳的価値の深まり

「授業づくりシート」を活用することで、題材ごとに教材解釈に関して学年で協力して行えるようになり、より自分の学級に向けた授業づくりに注力できるようになった。

また、「役割演技」や事前アンケートを受けての共有の場面で意見が多く出るようになった。思い切って内面を表出できる児童が増えている実感がある。また、他者の意見にうなずく、他者の意見を受けて発言する等、他者を意識できる児童も多く見られるようになってきている。

（２）課題・道徳的価値の広がり

学んだことの自発的な応用や汎化がまだ十分ではない小学生段階では、内容項目に関して道徳科の授業場面では「点」としての一人一人の学びの深まりがみえた。しかし、児童によってはあくまで学んだことは「点」に過ぎず、他の学校生活場面では以前の状態であり、「線」や「面」として広がっていかないという場合が見受けられる。

小学校学習指導要領解説総則編には、「第６節　道徳教育推進上の配慮事項」が記載されており、各教科等における道徳教育が示されている。今後は教職員が各教科等で意識して道徳科での学びに関連付けていくことで、児童の認識を広げていく必要があると考える。

４　今後の展開

道徳科の授業場面における内容項目の深まりは大切なことである。講師からも「道徳科で学んだ道徳的価値は積み重なるとされていて、周囲からは一時的に落ち込んだように見えることがあったとしても、個人の内面では蓄積されており、下がることはない。だから道徳科での積み重ねが必要である」という趣旨の話をいただいた。もちろん道徳的教育は、学校の教育活動全般で意識し育成していくことが求められており、今回の道徳科での学びをもとに、各教科等や学校生活で広がるように努めていく必要がある。

また、家庭にも学校だより・懇談会等で研究活動の概要を伝えつつ、家庭生活でも道徳面の育成についての意識をもっていただくことを伝えているところである。

本研究で得た知見をもとに、道徳教育の全体計画の点検・見直しも進めていきたい。

道徳科の研究の結果、学級経営の重要性が浮かび上がってきた。また、現在の児童の実態から、低学年は「聞くこと・話すこと」、中学年は「友だちの理解」、高学年は「個と仲間のあり方」という次の課題がみえてきた。これから検討を重ね、これらの課題に対処する研究活動を推進していく予定である。